みをする壁がかすかに聞える。私はそつと寢床から拔け出て壁のする方にぬき足さし足で近寄つて行つた。何かもち小壁で話してゐるのが聞える。「おいおらあ寒くて〳〵。早く夜が明けたらよいがな。」それに答へる樣に今度は少し怒りのある壁で「おらどうも人間と言ふ者が氣に入らん。昔なら一錢〳〵として道端にぴかりと光つた物が目についたら我先にと取合つたものだが今は一錢等お金の勘定に入つてゐないんだ。此の間な、ほらあそこの駐在所の前の燒芋屋の所でおらの友達がそこの坊ちやんに「どこまで飛ぶかなあ、」と言つて一錢の投げ合ひをしてゐるんだ。おまけに投捨てたまゝ拾はうともしない、あはれにもどこへ行つたかわからんらしい。何とぢち當りな事をする子だらうとおらあきれちやつたよ」「うゝんそんな事もあつたか、おらあもうこゝにゐるのが一年足らずになるのやが誰の手ばもすがりつく事が出來すもう一生こゝを自分の住とするのかと思よと悲しくて〳〵。」「うゝんおらあ未だ一年にもならんが前はある教師の勝元におつたのだが金遣のあらい事あらい事おらあもうほと〳〵人間樣には愛想がついたよ。「再建日本だとか民主日本建設だとか大きい事を叫んでゐるが、金の尊さを知らない者等に何が出來るものか、それより自分々々一人々々がまともな人間であつてこそ民主日本が建設出來るんぢやねえか」私はこの話を聞いて思はず身振ひをした。それと同時に自分は今までこんな事を考へて一錢を大切に扱つたかしら？そうだ、その一錢がなくて一生を台なしにした人は何人あるであらう。

壇論徒生

島崎藤村

三年　赤木美代子

私達は島崎藤村と言へばすぐ椰子の實を思ひ出す。港を枕にして流離の夏を海の日の沈むに思ひ愚つた詩は好んで歌ふ歌である。「新生」を讀んでも「春」を讀んでも、苦しみや憂ひは到る所に表はされてゐる。「萬事休す」斯ふ思つた藤村が自殺を企てたのも「春」の中にある。肆多き身を誰にも見られまいとして逃げる樣に去つた外國への旅、そして異國での生活の苦難、それを突進んで受けようとしそして自分を救はうとした事は「新生」に書いてある。

纏てがこんな調子で書かれてゐたなら諸者の立場としてどうなるだらう。しかし、藤村の作品をよむと親しいものに觸れ地味な暗い感じのするものでありながら、そこには自分の信じた道を自分で進まうとする力絕對に人に支配されなかつた強い強い信念、それらが一塊となつて私の身に打ち返つて來る事を感じる。曲折の多い一筋の細い道をとぼ〳〵と歩いて、やつと目的地に着いたと言ふ感じがする。あらゆる所に自分を描き又それをあからさまに表した、苦しい時の自分、憂うつな時の自分だん〳〵と開けて來た自分の道を見つけた時の藤村、あらゆる作品の中に、それを寫して來たから、一筋の道の如く思へるのであらう。「生ひ立ちの記」より初まる藤村の自叙傳は四五才の頃より四十七八才に到る迄の彼が歩いて來た生活の後を審さに見る事が出來る。生き返り〳〵しながら何度となく夜明けの氣分に躍らうとした藤村であつた。

生ありのまゝに物を見ると言ふ事がすぐれた文學を産み出すと言つた彼は、ありのまゝなる人生の中からありのまゝなる生き方をありのまゝに眺めて表現しようとしたのである。それで自らの中にかくれてゐる人生を、人の生きて行く姿を知らうとした。それであるから「春」にしても「新生」にしても、到る所に生きたいと言ふ慾望を書いてゐる。「あく自分の樣なものでもどうかして生きたい」これは仙台へ行く寂しい車中で思つた事である。「新生」に於いては受ける苦しみが多かつただけ生きようとする力が更に大きくなつてゐる。「死の中から持ち來す回生の力、それは彼の周圍の人達の願ひばかりでなく又彼自身の熱い望であつた」死の中から湧き上つて來る回生の力こそ、新生の主人公岸本を新生させた基であつたらう。道德的には到底許されべき筈のない岸本も彼自身の心の中で、苦しみ惱み悶それ等のものとそのまゝ新しいものに生かさうと努めた。それで彼の待ち受けた夜明けは遠い所から白んで來るものではなしに自分のすぐ足許から明けて來たのである。血から解き明され、肉から開放されて行く事を感ずると共に、暗かつた心も次第に明るい方へ延びて行つたのである。

「眞に過去るものは多少なりとも誠を殘すものである」

こう自ら言つた藤村は明らかにその過去る瞬間〳〵を眞に過去らせたのである。

平凡な文でありながら、汲んでも〳〵盡きぬ趣がある。「市井にあり」の中に物を上げる時にたくさん一邊に上げるより少しづゝ小出しして上げる方がよい。それと共に言葉も自分の持つ智識の小部分を繰り出して書けばそれが水の流るゝ如くなると書いてあつた。藤村は一寸見ると雜味のある書き方をする時がある。同じ事をくり返す樣な場合。しかしそれを何遍も讀んで見ると調子よく無理のない書き方に氣付くのである。特に感想集等にある文章等は散文詩的な趣のある藤村らしい文である。子供に對してやさしい父であり母でもあつた藤村は如何にも暖い地味な感じがする。それがそのまゝ文に表れて感想集「新片町より」にある「蹠子」や「市井にありて」の中の夜明けの中にはよく出てゐると思ふ。僅か二三行の中に「家」と言ふ空氣を僅かな言葉の中に限りなき示唆を含めた「東におき酒にのぞみ南に居り北に思ふ」「いらはかるた」の「犬も道を知る」「丘の樣に古い」「わからずやにつける藥はないか」「竹の事は竹に習へ」「がん具は野にも畠にも」「耳を貸して手に借りられ」と書いて居るのである。

浪漫的でそれで居て現實的なとも言ふ樣に形容したらいゝだらうか實に藤村こそ生きた人であり新生に多辯りついた人であつた。憂鬱も苦しみも惱みも罪多き過去も夜明けを太陽を仰ぎたいと思ふ心で押し通して目指す所へ辿りついたのである。

芝蘭會　文化友の會

新時代をむかへて、芝蘭會では、會員多數の要望により、文化友の會を左の如く定期的に開催する事となつた。尚、この會合には單に芝蘭會員のみでなく、廣く一般女子の參加をも歡迎するの事である。

一、毎月第二、第四土曜午後一時より母校會議室に於て

一、講師は文化各方面の一流人士を招き、座談會風に談話をうける

一、會費は月十圓程度

女專校長平林先生の講話

卒業生諸姉に

本校卒業生を求めて、多くの求人申込みが來て居ります、皆樣のうち就職希望の方は一度林先生のもとまで御連絡下さい。

先生めぐり

白川先生の巻

「あの新聞要員ですが……」

「何だい？」

「先生御趣味は何ですか」

「趣味？考へなきゃ分らないね」

「……」

「まあ碁だよ、學校で一番强いんだから」

「小ぼんちやんが碁とは……」

「教員セネストをどうお考へになりますか？」

「セネストについて？　急に云へないね」

「矢張り五百圓位ぢやつてけないよ。」

「それから」

「それよかもう鐘をならさなきやならない。紐が切れてる。椅子がないかな」

刊發祝

新刊書籍全般

樋口書店

アベノ齊場前・南一丁

曉

第一號

發行所

大阪府立阿部野高等女學校

新聞班

發刊の辞

岡田　剛

待望の學園新聞が發刊されました。それも校友會の規則と共に、校友會の一部門として、生徒達の手によつて、作られました。

學園の在り方が變つてから、機運の熟するのをジツト待つて居ることも隨分長かつた。それ丈にこの發刊に當つての喜びは大變に大きく、言葉で表はされない。

この新聞の將來への期待は非常に大きい。

此の新聞は學園をして、眞に樂しい學園たらしむるに非常なる推進力となるであらう。

我が新聞は、他の模放は餘りしたくない。或る特殊な人による指導的な臭や、民主線に添はないおしつけがましい臭は欲しない。

香りの高い、創造性豊かな、氣品の高いものでありたい。

新聞は學園關係者の生活の反映であるから吾も人も學つて日に日に生活の香り高きを期さねばならない。

終りに我が學園をして、眞に民主的在方に置き遂に樂しき校友會並びに新聞發刊に到る道に努められた諸先生並びに生徒達の勞を謝すると共に、今後いよ〳〵協力せられん事を切に希ふ次第。以上簡單ながら發刊に當り非常なる喜びと、將來への多大の希望をかけつゝ筆を置く。

學園自治

着々とゝのふ

教授内容に、自治委員會に、校友會に、學園民主化、自治体勢整備につき、教員生徒一体となつての努力を重ねて來た本學園では、早くも諸設の改革を全く完了、學園のあらゆる方面に至るまで完全なる民主化、生徒自由が完成された。

先づ教育方針其他學校運營の重要問題については、民主的に選出されたディスカッション・グループの先生方が積極的に、我々生徒の意見を容れて評議決定されてゐる、ディスカッション・グループが最も活潑に働き且最も効果的に學校民主化を短時日のうちに實現し得たのは、府下學園多しと雖も本校が先づ唯一のものであらうと思ふ。

一方、生徒側に於ても、いち早く生徒自治委員會が組織され、舊來の級長、副級長に代位された。各クラスから選出された二名づゝの自治委員會は全く自律的に生徒生活全般の問題につきその規正に責任をもつてあたつてゐる。

しかし、他校に比し本校に於いて特に生徒自治が完成されてゐるものこそ校友會組織であらう。その組織は最も民主化されたもので、最高實行機關である校友會委員會から、各部委員會（文化、体育、厚生、圖書新聞）班委員會に至るまで、全て運營の責任を生徒自身がもち教員は單に各班の顧問として、各班の活動に援助を與へるにすぎない、其他あらゆる民主的な特徴をとり入れた最も新しい新規約の下に出足したり校友會は更に、學校當局の深い理解のもとに、毎週火、水、午後を自由に與へられ、積極的に活動を開始してゐる。

改革された午前中の正規授業と共に、この校友會活動を、母体とする新しい研究によつて、新日本の理想的な女性が次々と巣立つて行くのも、さして遠い將來の事ではあるまい。

所懐

學園に於ける學課について

去る十一月三日配布した新憲法の册子は、既に過讀された事と思ふ。第十一條に〝基本的人權〟といふことがある。よく考へてもらひたい。この基本的人權の樣に吾人の教養或は教育について、〝基本的教養〟又は〝基本的教育〟とも言ふべきものが考へられないであらうか、考へないでよいものでせうか、男なるが故に、又は女なるが故に、社長なるが故に、技術員なるが故に、と考へる爲の學課は、中等學校に於いての教育に重要に考慮せらるゝものであらうか。

今迄の教育はその點遺憾な點が少なくなかつたであらうか。

人たるもの男女を問はず、社長技術員の別なく、基本的人權の如く、人たるものの人としての、〝基本的教育〟が先づ最重要に考慮せられて教育せられるべきものではなからうか

この基本的教育が大木の幹の樣に授けられ、男なるが故にか、將來特殊な職につくが故にとか、女なるが故にとか、枝の樣に考慮せらるべきものではなからうか。

この線に添つて學課の時間數等は考へられねばならないのではなからうか。

叙上、太い線を引いた基本的教育を考へる時、男女同權も男女共學も容易に考へ得られる樣に思はれる

推薦圖書

圖書班顧問

討論の——時間について

過去の吾人は授業時間中に、欲するまゝに質問したであらうか、他の人の言をよく聞き、判斷したであらうか自己の言を正確に他に傳え得たであらうか、學び居る學課内容をよく考察したであらうか、他人の討議文章等を盜みとつて來て自らのものとして發表したり、他の人から教へられたが眞に理解せず、自分のものとなり切らないものを發表して、自己の尊嚴を自分から傷つけてゐたものがなかつたであらうか、もしありしとせば、過去の授業樣式が現在繼續せられ居る今日上述の種々の惡い傾向の完全矯正は非常に困難であらう。

各自自由に討議せば叙上の惡德は矯正せられ、ひいて各學課の授業中にも各自は正しき在り方に置かれる事になり、理想的授業の出現も非常に早かからうと思はれる。又それを切望し、尚吾人の討論並びにその樣式に熟遙せられん事を希ふのが、討論の時間を設けた所以です

學科にもよるが、授業の時間が討論の時間の樣になることが最も重大な目的であることを、特に附言して置きます。

トム・ソーヤの冒險　マーク・トウエン　岩波文庫　二三・〇〇
世界人類史物語（上）（下）　ヘルマン　ヘツセ　岩波文庫　四〇・〇〇　八〇・〇〇
同　コフマン　岩波文庫　六・〇〇
青春彷徨
帝國主義戰爭と戰後の財産問題　大内兵衛　岩波書店　四・〇〇
芭蕉隨話　頴原退藏　新日本圖書株式會社　一五・〇〇
萬葉集講澤瀉久孝石山徹郎　同　日本評論社　二二・〇〇　三五・〇〇

歷史の意義

白川　正

歷史は人間にのみあるものである動物には歷史はない。たゞ本能によつて無意識に生活してゐるものには歷史はない。動物の生活を記錄すれば動物の歷史と云へるかも知れぬが、それは人間があるから書けるのであつて、動物の世界のみでは歷史はないのである。然らば神の世界に歷史があるか。ここにも歷史は存在しない。神は完全無缺であつてそこには何らの動揺もなく、進展性もない。たゞきまりきつたものだけがあるのである。こんな所に歷史があるだらうか。しからば歷史はたゞ動物と神との間と考へられる人間にのみあるのである。かゝる觀點よりすれば動物に理性の片鱗が出はじめた時、即ち人類の發生せしとき、歷史の發端があると云へる。而して人間がその理性を全く發現しそれのみによつて行動する時、はじめて歷史の終結はあると云へる。即ち人間が神より與へられた理智によつて行動するときに、未だ不完全な爲にこの社會に種々の問題を惹起する。色々なる性格種々な程度の智能によつて、人間は互に衝突し苦難の歩みをつゞける。これが歷史の姿と云へる。

而して一つの問題が解決されずに終る時必ずその歷史は前と同じ樣な姿で再びあらはれて來る。それは必ずあらはれずにおかぬのである。必然である。歷史はくりかへすと云はれるが、これはかくの如きを云ふのである。フランス大革命の後ナポレオンが帝位につき、のちブルボン王朝が復活し、再び七月革命を迎へ三度二月革命を迎へたのは何故か。而してナポレオン三世が又帝位につき、プロシヤに敗れて又共和國となつたのは何故か。實にフランス大革命の理想が國民によく徹底されてゐなかつたからである。

我が國が太平洋戰爭に敗れたことについての深き反省が必要である。國民は漠然と時を過してはならぬ。さうでないと必ずや再び色々の形で同じやうな苦難の歷史を迎へるであらう。ごまかしは絶對に許されない口先きだけの民主主義は何にもならない。歷史は何ものをも暴露せずにはおかない。誤れるものは必ずのちに問題を殘してゆく。少數のものの不完全さは小さな動揺ですむが、大多數の不理解は大動亂を起す。それが歷史の必然性である。歷史は神の裁判である。そこには何ものの妥協もない。我が國民は果してこれをよく理解し太平洋戰爭に對して深き反省をしてゐるであらうか。もつともつと深い所にそしてひろく世界に目をつけて行かねば到底救はれないのである。太平洋戰爭の歷史も無駄に經過したことゝなるであらう。歷史の必然性、それに深く思ひをいたすべきである。（二十一、十二、一）

聲　自由の

自由なる學園と討議

自由なる學園を討議、自分乍ら少々妙な題とは思ふが、今回學園新聞の發刊されるに際し、どうしても發表したい…といふよりは訴へたいもの、それはかうより外に云ひ方がないのである。

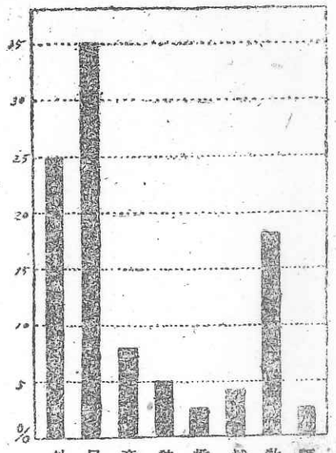
學園の自由が濫唱されるときにそろ〳〵と盛んになり出したのは討議である。正課の時間割を割いて、各級ごとに討議の時間が設けられた。これは全く喜ばしい事である。この一時間こそ、全く私達自身の力によつて、存分に己れを向上させることが出來るのである。それだけの力、私達は與へられたのだ。だのに、この討議の現狀はどうであらう。他はしらない。が私の知る範圍では、ただ皆が討議といふもの、考へてゐられるか、幾はしいものがあるやうに思ふ。

討議の時間の優劣を思ふ時誰しも頭に浮かべることは活潑、不活潑といふ事ではないだらうか。どうも不活潑であると、議長は一所懸命に『どん〳〵いつて下さい』といふ。ひどいのは議題をかへた事さへある。これでいゝだらうか。活潑か否かは結果である。一所懸命結果を目的を、眞摯をつかまねばならないのではないだらうか。もし活潑であつたとしても、誤つた自由の潛在意識の目的とはいたゞよつたお喋りの空氣のあるのではない。より深い實行力を養ふ前提なのではない。それを進んで自身の力で解決し、進んでゆくのが自由である。それを先づ頭で、友達同志が一體となつて掘り下げて考へるのが討議なのではないだらうか。これから考へれば先づ一番の問題となる議題についてどう考へればよいかすぐ分る事である。活潑に發言しやすい議題を選ぶ事の淺はかな事は云ふ迄もない。云ひにくい議題をさけてゐて人生の解決が得られるなら自由も何も要らないだらう。

今自分にとつて一番急に解決しなければならぬ事は何か。それをみつけるのが先づ一つの仕事である。これと定つたものは眞劍に考へ、どこ迄も進んでゆかねばならぬ。その眞劍さ、それが自由を得る前提たる討議の目的ではなからうか。

私の感じたのは自分のクラスの討議のみであつて、他のクラスは遙かにすぐれた討議をしてゐられるかもしれぬ。が、もしまだそこ迄いつてゐられないクラスがあるなら私は云ひたい。眞劍に考へ血のにじむ討議に生き、やがて眞に自由な、そしてどこ迄も眞劍な學園を作り出さうではないか。

（圖書室）研究關係
1946. 10月（一月統計）



和歌

一途なるあゆみなりきと蒼海にきゆる水洟をみつつ思ひぬ（船上にて）　乾倫子

胸にみつ思ひごとを吐きつくし友と向ひて默すたのしさ　水井モト子

しみじみとこの淋しさを語りあふきた友はしみとこの淋しさを思ふこの頃　石黑時子

葉末より裝束一つ下りゐて靜かなるまま靈近づきぬ　河野和子

住所のみ紙にしるして友去れり日だまり淋し今日の巢ひは　うしほ

わけもなく歌口ずさみ長々と橋渡り來ぬ暮色の街を　鶴子

日曜日田舍へ歸り稻刈れる父手傳ひてひねもす働く　雅子

なつかしき友の便りを開きつつ思ひ浮ぶるかなた淡路ゝ　石井陸

おとづれる人なき家に母上と待ちわびて居り遠ちざる父　佐藤正子

俳句

雲かげの海は紺なる浦千鳥　乾倫子

秋燈下衣縫ふ母の面淋し　冨田澄子

茄子一つまがりくねつて秋の風　ひぐらし

枯花にそれでも蝶のとまつてる　大内芳子

祭太鼓やみて濃くなる天の川　川瀨宏子

たゞまに伸びし大根にしぐれけり　うしほ

母懸ふるわれに鶏頭いや赤きすぎる

校友會の活動

ソフトボール班

第一回府下中等學校綜合體育大會に於て優勝（自九月二十一日至四日）

一回戰　對市立堺　三九對〇
二回戰　對聖泉　一〇對三
三回戰　對水谷　三一對七（コ）
準優勝戰　對清水谷　七對四
優勝戰　對市立東　四對一八

第一國民體育大會に於て優勝（自十一月一日至四日）

一回戰　不戰勝
二回戰　對宣眞　二九對七（コ）
三回戰　對双葉　二二對一〇
準優勝戰　對聖泉　二〇對四
優勝戰　對富田林　九對七

體操班

九月二十七日の第一回國民體育大會に於て、本校體操部員五名は、榮ある優勝の榮冠を得たり。その成績左の如し。

優勝阿部野高女　三一
第二夕陽丘高女　三〇二
第三清水谷高女　二九七

「優勝の榮冠を共に喜ぶと同時に此の日本を背負つて立つ私共の雄々しい氣力と、女學生としての美しい心さを、祖共の體操の中から一歩々々磨いて行きたいと思ひます。」と體操部員は希望の目を輝かせて語る。

びち〳〵とした小魚の樣な體をもつた部員の練習振りを見ると、全く元氣に滿ち溢れて、明朗な中に鋭敏さをもつた血潮は、どこまでも目的に目指して突進してゐるやうに見受けられ、將來を非常に頼もしく思はせるものがある。

卓球部

第一回府下中等學校綜合體育大會第一回戰　不戰勝

第二回戰　對八尾　一對三（負）

十一月二十日佐野高女との練習試合は五對二にて負けましたが私達は明るく樂しく不斷の努力をつづけ嘗て府下に於て幾度か覇を唱へた輝かしい黃金時代の再現をめざして居ます。

書道班

現在その希望者三百數十人自ら筆をとつて書をたゝらふばかりでなく、古人の名蹟をまなび、現代の名筆にふれ、清く美しい心の持主となるやう、佐野先生よりの御指導を仰いでゐます。かうして書道の眞髓にふれ香たかき眞の日本書道の眞髓新日本の文化建設をめざしてゐます。

音樂班

校友會事業の一つとして、音樂班が新しく設置されました。

音樂それはどんなに私達の心を和やかにし、又慰めてくれる事でせう。自ら音樂する事にすべてを忘れ、音樂の中に身をゆだねて、その中からは生れたものは、どんなに清く、美しいものでせう。美しい家庭、樂しい家庭であつてこそ、人間としての生甲斐があるのです。音樂と云ふ藝術の眞の美しさによつて、せめて音樂班だけでも、情操の豐かな、かぼそい存在でありたいと思つて居ます。

洋裁班

夏季休職の洋裁研究會に引續き日本の服裝文化についての研究をめざして班員を募りました所約、人の希望者がありまして此程洋裁研究班が出來上りました。畢に洋裁と云ひましても研究材料は非常に豐富なので左の樣な部に分けました。

一、理論的研究部
二、縫方實習
三、裁斷專門
四、刺繍

以上の樣な方面に分け、小林先生の指御導の下に着々と研究を續けて居ります。

人物畫

新聞賣りの子

二年　吉川みつ子

だんだん秋も終りに近附いて來た冬の氣も一刻〳〵と身近に迫つて來る。特に朝夕の冷える事は、私達にも冬が來たと云ふ事を強く感じさせてくれる。その冷たい空氣の中で、靴下もはかず、うすいスエーター一枚で、寒さうにふるへながら、新聞の大きな束を、重さうに脇に抱え込み、その上に肩から鞄をかけてゐる。一目見ただけでも、可哀さうだなあと言ふ氣持がむら〳〵と湧き起る。近頃毎日はど見受ける此の女の子、どこから來てどこへかへるのだらう。姿を見ると、どうやら新聞を賣つてすぐ學校へ行くらしい。よく賣れた日はよいが雨が降つてゐる日等はどうしてゐるのであらうか。私だつたらどう困つて泣き出すに違ひない。でもあの子は、雨の日も風の日も毎日新聞賣りをしてゐる。偉い子だ。私よりも年が下なのに泣きもせずすそれがあたり前のやうに自分の務めを守つてゐる。大きな束を小さい脇に抱へ込んで落すまいとしてゐる子、あの子の姿は何か天使のやうにしかあの子は新聞を賣つてゐる。いや天使のやうな立派な子であればこそ、あんな苦しい務めも默々とやつてのけるのではあるまいか、今日もしかとしと雨が降つてゐる。雨が降つて人出の少い今日、少しでも早くあの子が、たのしい學校に行けう事を念じつゝ見送つて電車に乘つた。

淋しき世の中

三年　高橋かほる

「エー甘い〳〵パンはいかゞ」。「十円でこんな大きなパンはいかゞ」。

醫商人敗戰後急に出來た大阪商人である。「ビースにコロナ、光にのぞみいかゞですか」。枯れた女の聲に振向けばぼろ〳〵のエプロン姿の女の人がボール箱に二十箇程の煙草を入れて哀願する樣にじつと顔を見てゐる。灰色の布をかぶせた樣なその人の姿は凡を不調和に煙草の箱の白が目に附く。はつと目をそらすとその人の足もとに四十位の男の人が顔中ひげだらけになつてぶつ倒れてゐる。時々お腹の邊がぴく〳〵動いて僅かに此の世に生命の殘つてゐる事を物語つてゐる。これがこの世の本當の姿なのだらうか。わづかそこから三十米程向かふにはピリ〳〵と笛の音圖に信號を見つゝ縱橫に渡つて行く文明人が居るではないか。キヤツ〳〵と笑ひつゝ行く若い女の人自分は一体これをどうしたらいゝんだらう。世の中は三つに分けられてゐる。生きようとして生き得られない人。苦しみ抜いて生きてゐる人。そして遊んで生きてゐる人。この三つの區切りが餘りにもはつきりしてゐる。僅か三十米四方のわくの中に此の三つの種類の人が居る。まこともに目を向けては見られない。生きる限りは美しく生きたい。望みのある生活がしたい。命が惜しい爲に生きる事はつまらない事だ。大きな望みの爲に樂しく美しく生きようとするのが人間の本能なのだ。けれど自分が美しく生き樂しく生活しようとすれば人も又美しく生きて行かなければ自分は美しく生けない。人間と云ふものは決して一人では生きる事が出來ないと云ふ事を知らなければならぬ。皆が皆ばら姿でやつて行きてゐるならそれでその世の中はどんなに樂しく美しいものになるだらう。貧しくても笑つて生きる事が出來る私共は皆と共に生きて行く限り立派な社會人とならなければならぬ。淋しき悲しき社會を作る事を誰が喜んで望んでゐるだらう。

一錢は歎く

一年　植田　智

ボーン〳〵〳〵〳〵夜の十二時があたりの靜けさを破つて大きく響いた。すると又打合せたかの樣に今日も又中二米もあらうと思はれる大きな藩から「ハックション」とくしゃ